

旅奴

へ降るは霰か初時雨 けさの出がけに棒ばなで 手当りまかせ酒機
嫌 へ五十三次また爰で 何で沼津に行かりようものか そりやこそ
はらも吉原と 口合まじり来りける へどつこい へとまつた へ水
溜り

へナ、何だ 歩けば歩く 止まれば止まる ナナ何故俺の真似
をしやアがる

へ向はたしか左りき、 あるけばあるく止まれば止まる コリヤどう
ぢや へハ、わかつた へ影法師 へ旅は道づれ夜はふぎけ とんだ
月夜と小室ぶし へ上り下りのおつぐら馬よ さても見事な手綱染か
いなアエ 馬子衆の癖か高声で 鈴をたよりに小室ぶし 吉田通れ
ば二階から しかも鹿の子の振袖で へ振つてふりくる御国入り へ
殿の帰りを窓から見たれば 台傘 立傘 曳馬御徒に若徒草履取
槍持コノかつば籠 アレハサノサ へコレハサノエイエイ へ浮き立つ空
も入相の 蒲原さして 急ぎ行く。